



経営計画について話す川崎重工業の橋本康彦社長=11月2日、東京都港区

川崎重工業が建造した世界初となる液化水素運搬船「神戸市中央区東川崎町2



指針を踏まえ、事業体制を再編成する。21年4月、造船とエネルギー・環境プラント部門を統合。液化水

■組織再編

新分野の開拓などで30年度の売上規模を過去最高だった19年度の1.5倍に当たる2兆5千億円へ押し上げるシナリオを描き、グループ内の力を集める。

川重「時代が求める姿」追求

10年後の経営ビジョン公表

遠隔、移動変革、水素に注力

川崎重工業(神戸市中央区)は、10年後に目指す将来像として先月公表した経営指針「グループビジョン2030」で、新たな注力分野を掲げた。人びとの安全・安心につながる「リモート(遠隔)社会」、「人と物の移動変革」、水素を中心とする「エネルギー・環境」の三つだ。新型コロナウイルス感染症拡大を契機とする社会の変化を踏まえ、橋本康彦社長は「成長事業に投資しながら、時代が求める姿に(川重を)変容させたい」と力を込める。(長尾亮太)

■ロボット

リモート社会の実現へは本年度から、国内医学界と協力し、内視鏡手術を支援するロボットで遠隔手術の試みを始める。医療検査機器メーカーのシメックス(神戸市中央区)と開発した国産初のロボを使う。遠隔で操れるようにすれば、少ない医療スタッフで手術が可能になるといふ。

移動変革に向けては、ロボットと乗り物、航空の技術を融合し、社会課題に対応する。コロナ禍で利用が拡大した宅配向けは、無人ヘリコプターが荷物を長距離搬送し、自走式ロボットが玄関先まで届ける構想を持つ。非接触サービスによる感染防止と人手不足の緩和に貢献する狙い。

政府には「救難病院船」を提案。オフロード車や非常用発電設備など多彩な川重製品と並んで遠隔の手術支援ロボも配備し、地域で選ばずに専門医療を提供できるようにする。

「水素を大量輸送するシステムを確立することで調達価格を引き下げ、普及を図る」と橋本社長。水素を燃料に二酸化炭素(CO₂)を出さない発電事業も進める。水素関連事業の売上高は2030年に1200億円、40年に3千億円を目指す。

2020年12月2日 水曜日 神戸新聞分

兵庫が誇る日本の川崎重工が描く、将来の構想に力を貸すのは君達世代です。
特に理系諸君の今後の奮起と文系諸君の企画力を以て、兵庫からの強い発信を期待します。